



Data	2023-96
監督:	バリー・レヴィンソン
原作:	アラン・スコット・ハフト
出演:	ベン・フォスター／ヴィッキー・クリプス／ビリー・マ グヌッセン／ピーター・サー スガード／ダル・ズーフス キー／ジョン・レグイザモ／ ダニー・デヴィート

👁️👁️ みどころ

“アウシュヴィッツもの”と“ボクシングもの”が合体した映画は『アウシュヴィッツのチャンピオン』(20年)だけ。そう思っていたが、よく似たタイトルの本作が登場！

あれが実話なら、これも実話！しかし、前者は、同じ囚人たちのパンのため、薬のために戦ったのに対し、本作の主人公ハリーは何のために戦ったの？

“アウシュヴィッツの生還者”の第2の人生がアメリカだったことはうなずけるが、1949年のハリーはニューヨークで「アウシュヴィッツの生還者」を“売り”にリング上に立っていたから、アレレ。よくそんなことができるものだ。そう考えた新聞記者から取材を申し込まれると、“ハリーの秘密”を知る兄の反対にもかかわらず、ハリーはそれを受諾！その理由は？思惑は？

本作はハリーの息子の著書に基づくものだが、取材以降、①ハリーの世界チャンピオン戦への挑戦と敗北、②ハリーの結婚と第2の人生のスタート、そして2人の子供の誕生と続くが、更に、③「アウシュヴィッツからの生還」から14年後の1963年、ハリーは恋人レアとの奇跡の再会を果たすことになるからビックリ！こりゃ、出来過ぎ！？誰もがそう思うが、そんな体験を経たハリー一家の絆は？

移民の国、自由の国アメリカの懐の深さにも納得！

■□■あれが実話なら、これも実話！その対比は？■□■

“ボクシングもの”の名作は『ロッキー』シリーズをはじめ、数多い。しかし、“アウシュヴィッツ”を冠にした、“実話に基づくボクシングもの”は、『アウシュヴィッツのチャンピオン』(20年)『シネマ51』83頁)だけ！？同作は、アウシュヴィッツ収容所が建設

された1940年に“第1期生”として入った、ポーランド人の“囚人番号77”こと、テディを描くものだったが、そんな映画は同作が最初にして最後のもの。私はそう思っていたが、同作と酷似するタイトルの本作が公開されたからビックリ！さらに驚いたのは、本作も“実話に基づく物語”であることだ。

本作冒頭、「ポーランドの誇りにしてアウシュヴィッツの生還者」を“売り文句”に、1949年のアメリカのリング上で話題を呼んでいるボクサー、ハリー・ハフト（ベン・フォスター）の姿が登場する。本作の原作は彼の実の息子であるアラン・スコット・ハフトが書いた著書だ。『グラディエーター』（00年）はコロシウム（円形闘技場）で戦う奴隷の物語だったが、『アウシュヴィッツのチャンピオン』の主人公テディがリングに上がって戦ったのはパンのため、薬のためだった。しかして、本作の主人公ハリー・ハフトは何のためにリングに上がり、試合を戦ったの？そしてまた、幸いにも「アウシュヴィッツの生還者」となった彼は、なぜ戦後アメリカに渡り、1949年の今、アメリカのリング上で試合を戦っているの？

■記者の取材目的は？応じることの功罪は？■

1949年、NY市のコニーアイランドのリング上で、ハリーは華々しい活躍を続けていたが、戦時中の記憶のフラッシュバックに悩むようになった現在は、6連敗中だ。ある日の試合終了後、兄のペレツ（サロ・エミルゼ）とバーで一緒に飲んでいると、エモリー・アンダーソン（ピーター・サースガード）と名乗る記者から、「君の人生に興味がある」と取材を申し込まれることに。

ハリーはそれを聞いていた兄から、「誰に頼まれても喋るんじゃない。絶対にな」と強く釘を刺されたが、兄が取材に強く反対する理由は一体ナニ？他方、8年前に収容所に連行され、行き別れになった恋人レア（ダル・ズーゾフスキー）を今なお探しているハリーは、この取材に応じたものが記事になれば、ひょっとしてそれを読んだレアと会えるかもしれないと考えることに。

そう考えると、ハリーにとって、この取材に応じることの功罪は？

■ハリーの決断は？世界戦への挑戦の狙いは？■

そこで、ハリーがレアに自分の無事を知らせる手段として思いついたのは、自分と次の世界チャンピオンと目されるマルシアノとのタイトルマッチ戦。この世界タイトルマッチが広く報道されれば、生きているはずのレアは必ずその記事を読み、ハリーに連絡してくるはずだ。そう考えたハリーは、実力では相手にされないマルシアノの気を引くために、アンダーソンの取材を受ける決断を下すことに。

そこでハリーが語ったのは、自分がアウシュヴィッツで生き残ることができた理由は、ナチスの親衛隊中尉シュナイダー（ビリー・マグヌッセン）から、将校たちの暇つぶしに主催している賭けボクシングに出場するよう迫られ、やむなくそれに従ったところ、対戦相手となった同胞のユダヤ人たちに次々と勝利し、負けたユダヤ人はその場で射殺された

という驚愕の事実だった。この賭けボクシングに勝利することは、ハリーにとって生きるためにやむを得ない行為だったが、ハリーに敗れて射殺されたユダヤ人には、ハリーの親友も含まれていたから、そこでハリーが心に受けた傷は大きかった。

数日後、「生還の代償。背信のボクシング」というスキャンダラスな見出しで掲載されたハリーの記事は、大きな反響を及ぼすことに。その結果、ハリーは一方では、兄が心配していた通り、ユダヤの同胞たちから「裏切り者！」と非難されたが、他方で、狙い通り“ポーランドの誇りにしてアウシュヴィッツの生還者”を売りにしたハリーに興味を示したマルシアノとのタイトルマッチが実現することに。

■□■ハリーは世界戦の実現とその敗北をどう受け止める？■□■

映画は時間を自由に操れる芸術だから、何かと便利。そこで、本作は、アウシュヴィッツの収容所時代に、かつてコロシウム（円形闘技場）で戦った奴隷と同じように、ナチス将校たちの賭けの対象として、リング上でボクシングの試合をするハリーと、1949年の今、NY市コニーアイランドのリング上で試合をするハリーの姿を交互に映し出していく。

そこで驚くべきことは、第1にハリーを演じたベン・フォスターが28kgもの体重減をして本作の撮影に臨んだため、アウシュヴィッツ時代の痩せ細ったガリガリのハリーと、今は小太りの中年男になってしまったハリーの両者が交互に登場すること。第2に、本作はカラー作品だが、フラッシュバックの手法で登場してくるアウシュヴィッツ収容所時代は、すべてモノクロ撮影になっているから、その撮影の対比にも注目！

他方、とりわけ『ロッキー』シリーズでは、ラストに登場してくるクライマックスの対戦に向けて、コーチと共にハードな練習を積み上げていくロッキーの姿が印象的かつ興味深かった。しかし、本作中盤に見るトレーナーのペペ（ジョン・レグイザモ）の指導の下でのハリーの練習風景や、マルシアノ陣営のコーチであるチャーリー・ゴールドマン（ダニー・デヴィート）を特別コーチに招いてのハリーの練習風景はどんな意味があるの？なぜなら、両者の実力の差は最初から分かっているし、万に一つもハリーに勝ち目のないことは誰の目にも明らかだからだ。それを誰よりも正確に見抜いているチャーリーは、「せめて第1ラウンドだけでも・・・」と、“ある策”を授け、それはそれなりに功を奏したが、結果は予想通り、ハリーのノックアウト負け。これにてハリーはボクシングの世界を引退する決意を固めたが、彼はこの世界戦と、その敗北をどう受け止めるの？

■□■興味深い親衛隊中尉のキャラに注目！ある種の友情も？■□■

本作と同じ日に観た『クエンティン・タランティーノ 映画に愛された男』（19年）では、『イングロリアス・バスターズ』（09年）（『シネマ23』17頁）で“ユダヤ・ハンター”の異名をとるナチス親衛隊のハンス・ランダ大佐役を演じたクリストフ・ヴァルツが、同作やタランティーノに関するさまざまな逸話、秘話を語っていたが、同作でのランダ大佐の悪役ぶりはほとんど徹底していた。ところが、本作でハリーのボクサーとしての資質を見抜き、彼を囚人同士の賭けボクシングの“ヒーロー”に祀り上げていったナチス親衛隊

中尉シュナイダーは、立場の違いこそあれ、「こいつはいい奴だ」と思わせる(?)面があるのでそれに注目!

現在放映中の NHK 大河ドラマ『どうする家康』は、常に家康への“選択肢”を示し、そこでの彼の“選択”に焦点を当てているが、それはシュナイダー中尉も同じだ。その選択がハリーにとって残酷なものであるのは当然だが、少なくともシュナイダー中尉の主観において、彼はハリーに対して“強要した”とは考えていないだろう。そればかりか、ひょっとしてシュナイダーはハリーに対して、賭けボクシングで共に戦う“戦友”のような友情のような気持ちを持っていたのかもしれない。

そんな 2 人の間の微妙な気持ちの動きは、ドイツの敗色が濃くなり、ソ連からの反撃が強まる中で、収容所が閉鎖され、シュナイダー中尉もハリーたちと共に西に向かう“敗北の行進”を進める中で少しずつ明らかになってくるので、それに注目! 2 人だけの状況下で立場が逆転し、ハリーが銃をシュナイダーに向けてることになると、さあ、そこでのハリーの決断は・・・?

■□■ハリーの結婚相手は?引退後の生活は?■□■

本作は、実の息子のアランが「アウシュヴィッツの生還者」たる父親、ハリーの人生を綴った著書を原作とした映画だが、ハリーの妻、つまりアランの母親についての描写は少ししかない。もちろん、本作は「アウシュヴィッツの生還者」たるハリーに焦点を当てた物語だから、“生還”後、ハリーが誰と結婚したかは基本的にどうでもいいこと。しかし、ハリーがマルシアノとの世界タイトルマッチに敗れ引退を決意した時は、同時にそれまでレアを探すことに何かと協力してくれていた、移民サービスに勤めている女性、ミリアム(ヴィッキー・クリープス)とすんなり結婚することになったからアレレ。

もちろん、それはそれで悪いことではない。その結婚とボクシング界からの引退によって、ハリーが「アウシュヴィッツの生還者」という肩書きを捨ててしまうことができれば万々歳だ。しかし、ハリーはこのように新しい人生に踏み出しながら、なおミリアムにも、そして記者のアンダーソンにも未だ話していないアウシュヴィッツ収容所時代のつらい思い出があったらしい。

そのため、ハリーは 1963 年の今、ミリアムと共にブルックリンで生活用品店を営み、2 人の子供にも恵まれていたが、そこに 14 年ぶりにアンダーソンが現れ、ようやく見つけたというレアの住所を渡したから、さあ、ハリーはどうするの?まさか、今の安定した生活を捨て、1 人でレアのもとへ?いやいや、それはないだろう。しかし・・・。

■□■この再会は出来すぎ! ?米国讃歌にも納得! ■□■

ハリーがボクシング界を引退した(表向きの)理由は、世界チャンピオン戦に敗北したためだが、それ以上の(ホントの)理由は、その試合中にリング上でレアの死を感じ、確信したためだ。ハリーはそのことを明確に兄に告げた上でミリアムと結婚し、新しい生活に踏み出したのだから、最初にハリーに取材を申し込んだアンダーソン記者は、その後、

レアの生存が判明したとしても、それをハリーに伝える必要があったのかどうかは疑問だ。アンダーソンがもし、それをハリーに伝えていなければ、本作ラストに見るハリーとレアとの奇跡の再会シーンはなかったはず。また、本作ラストに登場するハリーとミリアム、そして2人の子供たちをビーチ上に映す映像も登場しなかったはずだ。

賭けボクシングに勝ち抜くことによって「アウシュヴィッツの生還者」になったハリーと、ハリーとは全く別の方法で、奇跡的に「アウシュヴィッツの生還者」になったレアが、14年後の1963年に再会するというのは、いくらアンダーソン記者の粘り強いレア探しの努力があったとしても、あまりにも出来過ぎ！？誰もがそんなシーンの実現を信じられないはずだ。また、そこで興味深いのは、ハリーがそこに長男のアランを同行させたこと。もちろん再会のシーンは2人だけだったが、ハリーはなぜ自分の息子アランをそんなところに同行させたの？それをしっかり考えたい。他方、ハリーが一家4人で旅に出た理由がレアとの再会にあることは、ミリアムも感じ取っていたようだが、ハリーがレアと会っている間、ミリアムはじっと待たされていた。それは一体なぜ？それも併せてしっかり考えたい。

そんな検討(?)が必要なシークエンスの後、本作ラストは海岸のビーチチェアにハリーとミリアムが並んで座り、その側で2人の子供が遊んでいるシーンになる。そして、その直後に2人の口から、自由の国、移民の国、アメリカを讃美するセリフが流れてくるので、それに注目！もちろん、これには賛否両論あるところだが、日本は基本的に外国人に対して閉鎖的な国であるのに対し、アメリカは移民の国、そして自由の国だ、ということに私は納得！

2023（令和5）年8月24日記